

道具は語る 摂津市の昔の暮らし

ちょっと



盥は洗濯だけでなく、行水にも使用されました。

夏には朝から盥に水を入れていたら、行水する頃には水が暖かくなっていました。

郷土摂津
いにしえ通信

第27号

平成十二年七月一日
発行
摂津市教育委員会
生涯学習部生涯学習課



近世の洗濯風景

腰を掛けて洗濯していました。腰を掛けると身体の重心は洗濯物には掛かりません。汚れを落とす主力は、力で揉むことよりも、洗剤に浸すことでした。

「浮世十六むさし」大田記念美術館蔵を
Y・Mが模写しました。

第3回 洗う 盥(たらい)

わりもいいのですが、汚れやすく、汚れが落ちにくい欠点もありました。また繊維が踏み洗いに向かず、洗剤がいろいろと開発されるようになります。

洗剤（天然素材）を用いるために使われたのが結盥でした。洗濯用として浅い盥が出現してから、またたく間に普及していきました。

結桶自体は室町時代から使用していましたが、踏み洗いだっただけ、盥の必要はありませんでした。

近世に入ると「盥でじゃぶじゃぶ」という洗濯がはじまります。これは木綿と結盥（ゆいだらい）の普及に起因しています。

木綿は戦国期頃からしだいに衣服に使われるようになりましたが、最初は高級品でした。しかし、西日本を中心に木綿の栽培が進んだ江戸時代中期以後は、一般庶民にも木綿の衣服や寝具が行き渡るようになりました。木綿は従来の麻や科などより暖かく、吸湿性に富み、肌ざ

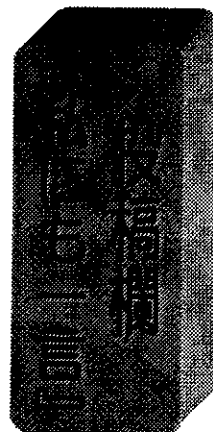
本年度のふるさと摂津講座が始まり、係員の熱心なお世話で種々楽しみ話を聴講できるのが、今からとても心をわくわくさせる。去年から仲間に入れてもらい、我が街の来し方のいろいろを学ぶことが出来るのがいい。この街に住んでからずいぶん歳月を経ているのだが、ずっと大阪に勤めるだけの日々が過ぎて関心を持ちながら、昔の摂津を知る機会がなかったように思う。

教えてもらった史蹟や名所などを、後日自分なりにひとり歩きして

たのしみな ふるさと摂津講座

千里丘東4丁目

宮田一朝



はじまりました。ふるさと摂津講座！

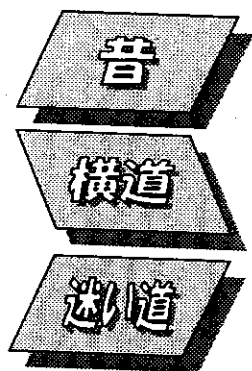
ふるさと摂津講座の受講生を募集したところ多くの申し込みがあり、会場を福祉会館へ変更して第1回を開催しました。おなじみの顔、はじめての顔が講義に聞き入っていました。楽しい雰囲気での講義、また受講生からの情報コーナーもできました。途中からでも受けたい方は、生涯学習課までご連絡ください。

みるのも、とつても楽しみになる。

今年度の講座内容も予定を見ていると、目新しい講座が聞けるようだし、歴史散策も組込まれているのが嬉しい。

参加の人々も去年よりは多く、賑々しくなりそうである。折角の参加なのだから、休まないように心がけて参加したい。

講師の方々にも、ぜひ楽しい講義をきかせてほしいと心からお願いする次第である。



先日の夜、星が見えないかと、淀川の河川敷に行きました。驚いたことに、あたりに灯は全くないのに、空は異様に明るいです。特に下流の大阪方面の空は、赤っぽい光にあふれています。そして、見えない車の騒音などが、地鳴りのように響いていました。

もう今では「鼻をつままれてもわからない闇」や「針の落ちるのが聞こえる静けさ」は失われました。でも、昔はそれが普通だったのです。

千里丘東五丁目の人から聞いた話では「大阪の市電の音が聞こえてくる」ことがありました。チンチンと「と聞いて驚いた」ことがありました。今では想像もできません。

夜も暗かったようです。別府で聞いた話では、村のメインストリートも真っ暗で「タバコ屋までお使いにいくのが恐かった」とか「白いユカタが干したままになっているのを

幽霊と間違えて、大騒ぎになった」などと聞きました。

そんなことから、夏などに若い衆はよく肝試しをしたようです。別府では、集合住宅から一人づつ、村の墓場の火屋（火葬場）の裏まで行つて、そこに自分の名を書いた杭を証拠に打って帰ってくるという遊びです。そこには古い井戸があつて、腹の子が捨てられることがあるという噂の場所です。特に怖いところでした。

ある時、順番でそこへ行った男が「エグイ叫び声」をあげたので、何事かとみんなで駆けつけてみると、杭を自分のユカタの裾に打ったのを知らなくて、何かに引っ張られたと思ったんだそうです。

物でも光でも音でも、無いなら無いでそれなりの意味もあるんだなあと思います。

失われた「静けさ」と「闇」

源 助一

郷土摂津いにしえ通信

鳥養の歴史

鳥養氏の治水

古代において開墾可能な土地がすでに耕地化されたのち、中世に新耕地を求める場合、自然との戦いは熾烈でありましたが、荘園制の崩壊に伴う農民の自立と団結は、自然を克服する積極的な力を生んでいきました。特に淀川は、沿岸に生活している農民たちが、

荘園や村落という組織を越えて、地域共同体としての結びつきを強化する紐帯となりました。その結合が、築堤をはじめ伏樋や出樋、あるいは悪水抜きなどの土木工事を可能にし、低湿地の耕地化が促進されました。

高槻市の葉間家文書に三ヶ牧地域（現高槻市）と鳥養地域との連携を示すものが九通あります。これらは鳥養地域から三ヶ牧地域に宛てたものであり、書状は両地域間で交換されたはずですが鳥養側には現存しません。書状はすべて年

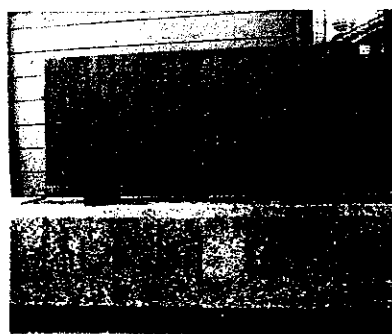
号を欠けますが、記載の人物名から「鳥養左近大夫」の時代二通、「鳥養宗慶」の時代七通と推定されます。鳥養左近大夫は『証如上人日記』天文六年（一五三七）正月十九日条に三宅出羽守の使臣とあり、鳥養宗慶書状中の一通は三好三人衆の石成主税助・寺町左衛門大夫宛で永禄期前半のものと判断できることから、一連の書状は十六世紀半ばころのものと推定されます。ただし、書状の包装には「文亀式年（1502）」とあります。

書状はいずれも治水に関係するものであり、差出人の「鳥養左近大夫重家・鳥養越前守重永」や「宗慶（鳥養入道・とりかい公文宗慶）」は、土豪や荘官として用水や悪水処理設備の管理権を掌握していたのでしょう。文面には「湛水の儀、内々申し談ずる如く、三樋の水落ち候はば、同前の小樋共明け之を進ずべく候、其方水落とさるべく候、然れば御領内にて縄手の儀、堅固に仰せ付けられるべき事肝要に候」、「六反田の樋つづれ申し候間、今日ふせ申候、右の樋すへは八寸三分、もどくちは八寸七分ほど候間、右の書付こ

の在に書付給うべく候、則ち御存じ候て御越し待ち申し候」、「此方に水御座無く候て、迷惑仕り候間、今日かわせき申候、さように候へば、此方のなわて然るべき所きり申し度く候間、その御心得候て下さるべく候、急水の儀に御座候てかくの如く申さしめ候」、「さねまさ樋のくちつかせたて、むしんの申事にて候へ共、その近辺しはすこし所望申へく候」などがあります。三ヶ牧・鳥養両地域が領主支配を超越した治水共同体を形成していたことや、真正樋・三樋がすでに存在していたこと、堰堤に芝を植え崩壊・漏水の防止を策していたことがわかります。

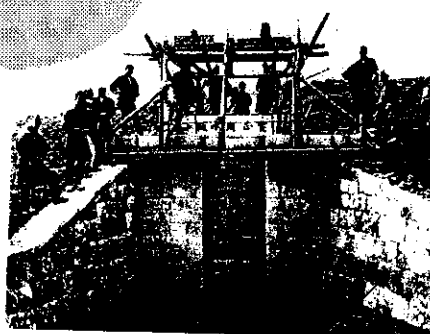
なお、鳥養宗慶（六左衛門、隣松齋は、細川氏の家臣飯尾彦六左衛門常房がはじめた飯尾流の和様書道をうけつぎ、新流を開いて鳥養流を名のつた人として知られています。

宗慶に由緒あるものとして、鳥飼中に「宗慶」という小字があり、その屋敷跡であろうと考えられます。また、鳥飼中と上の中間地点にあたる淀川右岸の中州にかつて「宗慶島」という名がありました。年貢50石相当の広さがあり、明治29年まで里芋畑や麦畑として耕作されていた。大正10年の淀川堤防改修のため、その土砂は採取され姿を消してしまいました。



摂津市史より

担当
(茗荷)



今は教育研究所の前にあります

淀川から水を引いていた真正樋

昭和8年頃まで使用していました。

巻之四 雑記

第27回

撰津市と水田の考古学

撰津市域の条里制(三)

最古の水田経営については、諸説がありますが、通常、弥生時代から日本において稲作が開始されたと言われています。弥生時代初期の水田経営の特徴として、近現代とひけをとらない完成された形で導入されたという事が挙げられます。

弥生時代を通じて存在した拠点集落として著名な福岡県板付遺跡では、稲作の導入時期から用水路、畔畔、杭列、井堰、矢板列をとまないます。このような遺構から農耕社会は成立時期から多大な労働力が投下されたことがうかがえます。また備蓄が可能な米は、富として蓄積されていきます。前代の縄文時代ではうかがえない、身分制社会の萌芽の時期とも言えます。

農耕社会はそれまでの狩猟・採集社会と異なり大地に痕跡を多く

残します。ピアノの鍵盤を整然と並べたような条里水田や山沿いの見事な段々畑や棚田は人間が自然と闘い克服していった努力の結晶と言えます。

条里制は全国的に行われ、特に西日本ではほとんど隅なく行われました。方格状に水田が整然とつくれ、道路や水路が見事に並び、自然に加えられた人工美の極致とも言われています。日本の条里制をエジプトのピラミッドに匹敵する大土木事業だと提言する研究者もいます。

しかし、不思議なことにこのような大土木事業でありながら、当時の記録にほとんど残っていません。前号で紹介したとおり、条里制の起源については、諸説があります。一般的には大和朝廷が確立した時期だと言われていますが、近年は古墳と条里、寺院と条里など多角的な方向から研究がすすんでいます。

さて、このような古代の大土木事業である条里制が市域でどれほど

残存しているのでしょうか。一つの手がかりとして、旧の小字名が挙げられます。現在でも地方によつては坪名を多く残している例があります。市域で関係のありそうな小字名を探すと、次のようになります。

烏飼地区

一ノ坪東ノ切 一ノ坪西ノ切

別府・一津屋地区

中坪 大坪 樋之坪 七ツ畔

味舌地区

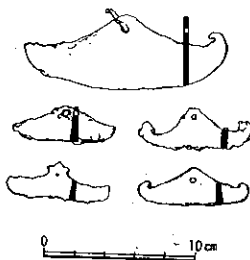
十五丁 北四角 南四角 市井 西坪井
東坪井 北条田 亀々坪 大字坪井

三宅地区

六ノ坪 七ノ坪 壱町手 大字小坪井

撰津市史より

◎次号では、発掘調査から明らかになる条里制について紹介します。



火打金

『日本考古学用語辞典より』

【ひ】火

○火の利用は人間と動物を分ける能力差の一つです。火こそは人間文化発達の原動力とも言えます。○日本では、縄文時代に土器が発明され、火を用いた調理法が確立し、食文化が飛躍的にすすみます。この時代に適した深土器が多く向がありま石は瑠璃・など堅い石の塊を相互摩擦させ火をつけます。堅い木を用いる場合もありました。○石や木の他に金属の火打金もありました。栃木県男体山遺跡から平安時代の火打金が一二〇個程発見された例があります

あ

からはいる新字

代には調理の鉢形の傾見られる傾す。○火打石英・水晶